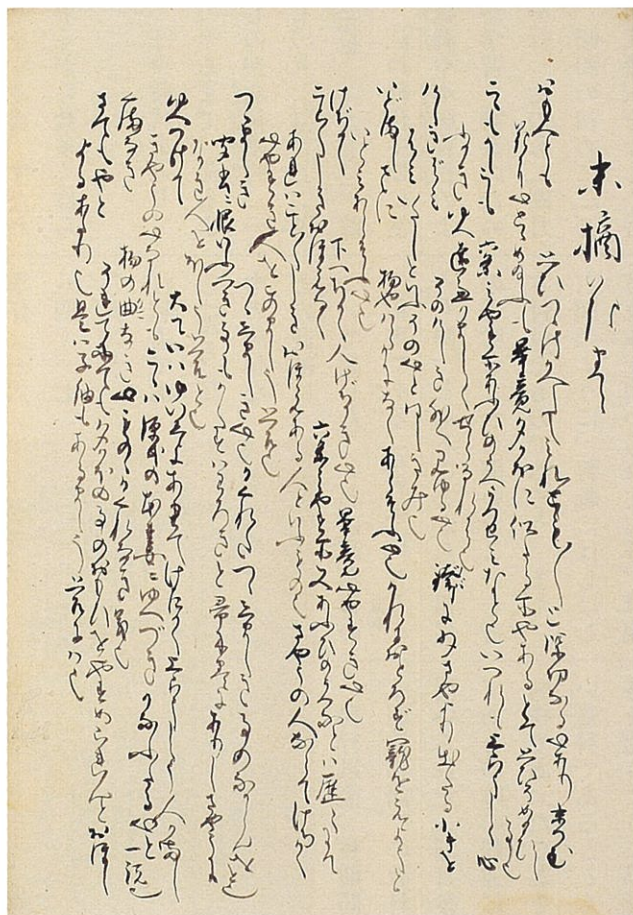


# やまとの名品 天理図書館



げんじものがたりうちぎき  
源氏物語打聞

[元禄・宝永頃]

北村季任自筆 存5巻3冊

原寸縦21.5cm 横16cm

平安中期に成立した『源氏物語』には、作中の語句や有職故実の解説などをする書、すなわち注釈書が早くから数多く作られてきた。

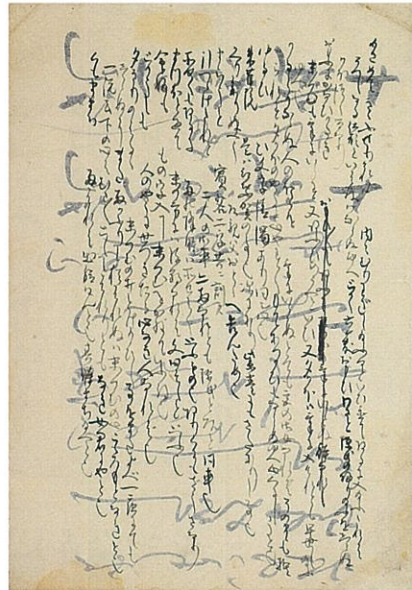
その中で、江戸時代を通じて、さらに明治に至るまで、最もよく読まれたものが北村季吟（一六二四～一七〇五）の著した『湖月抄』（延宝元年（一六七三）跋刊）である。江戸時代中期に活躍した賀茂真淵や本居宣長のよきな国学者が学習・講義のための書き入れを行ったのも『湖月抄』であり、昭和の初めに『源氏物語』の現代語訳をなした谷崎潤一郎が基づいたのもまた『湖月抄』であった。

掲出本は、

季吟の孫の  
季任（一六  
八四～一七  
〇九）が、

注釈書である『湖月抄』中の語句などの詳細に

ついて記した、いわば注釈書の注釈書である。元表紙に「さうしうち聞」とあることから、祖父の季吟などから聞いたことを書き付けたものである。また、右図のように、料紙にはしばしば反故が用いられており、草稿もしくは私的な学習ノートであったと思しい。



刊行以後、長期間にわたって

『源氏物語』の教科書のように用いられた『湖月抄』が、著者である季吟の周辺において既に同様であったことを示す興味深い資料であるとともに、祖父の跡を追うように早世した季任の生きた証ともいえる著作である。

（天理図書館 宮川真弥）